



30th Anniversary
純パの会30周年
1982-2012

Pure Pacific 純パ No.164 Nov.2012

純パの会会報『純パ』第164号

2012年11月24日発行

発行：純パの会 〒193-0816 東京都八王子市大楽寺町155-10 吉田方
TEL & FAX.042-652-1066

私の野球人生の宝物

塚原 隆

私たちが子どもの頃(昭和40年代)、プロ野球選手の引退は今ほど華々しいものではなかった。稲尾和久も黒い霧事件のゴタゴタで西鉄ライオンズの監督にはなったものの、現役を退いてしまった。榎本喜八も現役最後の1年は西鉄ライオンズでプレーをしていたが、いつの間にか球界から姿を消していた。翌年の開幕にファン手帳などのメンバー表で引退したことを初めて知るようなものだった。当時はそんな感じだった。唯一、引退試合を華々しく行ったのは、杉浦忠ぐら이었다。春のオープン戦だったと思うが、南海ホークスファンだった私はテレビ中継でこの試合を見ていた。何しろ当時は南海ホークスの主催ゲームをテレビ中継するのは、年に数回ぐらいしかなかった。それで良く覚えている。もちろん稲尾和久にしろ、榎本喜八にしろ、杉浦忠にしても全盛期のプレーは見えない。それでも偉大なる選手のプレーを晩年ではあるが、見ることが出来たのは幸せだったと思う。

今年もグラウンドを去る選手がいる。すなわち引退だ。どんなに偉大な記録を残した選手でもやがては引退の日が訪れる。いつまでもいつまでも元気なプレーを見たい気持ちはあるが、選手自身の体力と精神力の限界がそれを許さない。

2012年に引退をする選手で最後まで私たちが楽しませてくれたのは、福岡ソフトバンクホークスの小久保裕紀だ。8月14日に引退発表後、10

月19日のクライマックスシリーズのファイナルステージまで私たちに夢を見させてくれた。私はファイナルステージまでお付き合い出来なかったが、西武ドームでのファーストステージで最後のプレーを見ることが出来た。晩年は一塁を守ることが多かったが、若いときは二塁や三塁もこなした。意外と、と言うのは失礼だが、器用な選手だったと思う。

また10月6日の西武ドーム最終戦では、3人の引退あいさつがあった。大島裕行、佐藤友亮、平尾博嗣だ。2004年、2008年と二度の西武ライオンズ日本一の貢献者たちがグラウンドを去っていくのも寂しい。

2012年も残りわずかとなったが、グラウンドを去る彼らの最後の勇姿を球場で見ることが出来たことで、宝物がまた一つ加わった。私の野球人生の宝物である。

